

第8回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2024年11月5日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 36名
- ◇内容 学習指導案の相互検討①・単元構想案の相互検討④(学生)

【ルーム1】ファシリテーター：圓山裕史(奈良市立伏見小学校)

1) 菊池甲余子先生(姫路市立水上小学校) 特別支援学級 自立活動「いきいき野菜を作っていこう」

自閉症、情緒障害の児童 自分で育てたい野菜に名前を付けて、苗を植える
おいしい野菜にするために必要なことを調べ、お世話をする

トマトの枝葉が広がって、他の野菜の成長を妨げている 「どうすればいい？」

「切った方がいい」「切られたら困る」 → みんなが納得するように切ることに

切った枝の活用方法を考える → 腐葉土をつくる → 次は冬野菜を作ろう

収穫しておでんパーティーをする(保護者を招待して) 「自産自消」

循環していくことの意味に気づかせたい

意見交流から

- ・野菜を育てながら「循環する」ことの大切さを感じられるのがいい。学びが連続する。
- ・クリティカルシンキング「トマトの育ちはいいが、他の作物が…」のところ的印象的。
- ・外に出たくない子どもへの手立ては？ → 自分の野菜に名前を付けることで愛着をもたせた。
- ・自閉、情緒の子どもに見通しを持たせることは難しいと思うが。
→ もっと大きくしたい、今度は僕もトマトを育てたい
- ・5年生がSDGsの学習をしているので腐葉土の宣伝をしてみたら、野菜のくずなどを持ってきてくれた。自分たちで作った腐葉土を学年で使ってもらうなどの交流があればもっといい。
- ・「切る」「切らない」の対立のとき、「トマト博士」のようなプロに来てもらって話を聞くといいのでは。

2) 加藤茉莉先生(品川インターナショナルスクール)

小学校5年 総合的な学習の時間「心身の健康と成長」

国籍が多様な20名の学級 思春期にさしかかり、休み時間の会話にその類の話題も聞かれる
授業科目が公立学校とは違い、「保健」ではなく「探究」で取り扱う

小さいころからの自分の成長を、マインドマップに表す

健康を支える要因、ウェルビーイングについて調べ学習

自国の健康データ、日本との比較、健康チェックリスト作成

学校看護師、カウンセラーから話を聞く

異学年との交流(高校1・2年) 悩みを聞いてもらう

意見交流から

- ・最後のところでイメージするウェルビーイングとはどういう姿か？
→ 各自がマップや指標を用いて「今日の様子」を表現できればいいと考えている。
自分の「健康」の定義やイメージが広がればいい。

- ・異学年との交流をやりやすいのはうらやましい。特に、高校生と交流できるのがいい。
- ・最後の振り返りを書いたときに、導入で作成したマインドマップを見直してみるとよいのでは。
- ・グループワークのときにも、国籍の違った子どもにするなど、いろいろな子どもがいた方がおもしろい。
- ・多様な国にルーツを持つ子どもが集まっているのだから、幸福度の尺度も食べ物や宗教、環境など価値観が違ってくると思う。その多様性を理解することにつながると思う。
- ・自分にとってのウェルビーイングの具体的な姿を、各自が言語化できるといい。さらに、個人としてのウェルビーイングを共有しながら、集団としてのウェルビーイングって何かを考えさせたい。

3) 横井琴音さん(社会科教育専修3回生)

中学校2年 総合的な学習の時間「古墳の「これから」を探ろう」

寝屋川には古墳が3基あるが、ほとんど知られていない もとはもっとたくさんあった

古墳、古墳の痕跡をフィールドワークで探してみる(地名に注目)

壊された古墳と壊されていない古墳があるのはなぜ? → 市の文化庁担当者にGTに来てもらう

「大切なもの」って何だろう? それらを守っていくためには?

意見交流から

- ・古墳は壊されてきたのが当然で、守られてきた方が珍しいと思う。太秦高塚古墳が、個人が大切に守ってこられたというのなら、そういうストーリーを学んでいくとよいのでは。
- ・地域の魅力を発信するには、「大切にしていかなければならない」と実感できることが重要だと思う。そのためには、ただFWとGTから話を聞くだけでは得られない。
- ・古墳のアプリもあるようなので、それで調べてみるのも面白いのでは。
- ・「大切」という言葉は、人によって捉え方が大きく違うので、全体で「大切」を共有するのはかえって難しいのではないか。

【ルーム2】ファシリテーター：河野晋也(大分大学)

1) 高良直人先生(沖縄県伊平屋村立伊平屋中学校)

中学校 総合的な学習の時間「地域活性」

2) 西田有吉先生(生駒市立俵口小学校)

小学校5年 社会科・総合「食料生産」

3) 高橋百合香先生(鹿児島県屋久島町立小瀬田小学校)

小学校6年 外国語科「We live together ～私たちは一緒に暮らしている～」

4) 屋良真弓先生(沖縄県南風原町立南風原小学校)

小学校6年 社会科「平和で豊かなくらしをめざして」

【ルーム3】ファシリテーター：中村友弥(奈良市立朱雀小学校)

1) 原田龍ノ助先生(奈良市立朱雀小学校)

小学校4年 総合的な学習の時間「自然災害から人々を守る」

朱雀小の児童は、災害が比較的少ないと言われる地域に住んでいる。高台で近くに川もなく、地盤も

しっかりした地域である。だが、近くに断層があったり過去に南山城水害があったりなど決して油断できる地域ではない。児童は、防災は大事で準備もしているが、どこか他人事であり、真剣に取り組んでいないと感じたので、総合で授業に取り組んでいる。

学習のポイントは、地域が作成したハザードマップや作成者の自主防災の方々の話である。それらを通して、防災への意識を高めて行動できる児童の育成を目指した取り組みである。

※実践を進めているが、児童の学びで思うように高められていないのではないかと思う。終着点をどのようにすればよいか教えてほしい。

意見交流から

自助・共助・公助で整理して、ふりかえりをするのが大切。防災の学習は、最終的に自助が大切である。本当に起こったときに、自分の命や大切な人の命を守れるのかという問いをつらぬくことが大切。学習の原点に立ち返ってみる。時間で分ける。生きて家族に返すという教員の使命に立ち返る。バックヤードの視点。奈良市と木津川市との連携。

2) 栗谷正樹先生（大阪市立今川小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「新紙幣を起点としたノダフジの保存活動」

授業モデルの提案。ノダフジは、手入れをすることで花が咲いているが、高齢化の問題で担い手不足になっている。「吉野の桜、野田の藤、隆雄の紅葉」と呼ばれる。このままでは花を咲かせることができなくなってしまう。コロナ前までは、小学校とのつながりがあったが、今は途絶えてしまった。①新紙幣の導入→②まち探検（ノダフジ関連）→③ノダフジの会と出会う→④発問→アンケート

※「ふかめる」、「ひろげる」の発問で迷っている。アドバイスいただきたい。

意見交流から

導入が大切だが、魅力ある教材で、新紙幣に採用されている事実はインパクトがある。ノダフジのような地域遺産はたくさんあって、私たちが気づかないうちに失われているのではと思う。行政としても今がチャンスなのでは？なぜ積極的にならないのだろうか？

3) 才田優佳さん（特別支援教育専修3回生）

小学校6年 総合的な学習の時間「過去と未来をつなぐ武庫川」

【みつめる】小学校から武庫川が見える。なじみ深い武庫川。昔の武庫川を調べよう

【しらべる】昔の写真からわかること

【ふかめる】年表づくり → 昔の人の川の保全があって、今の武庫川がある

【ひろげる】他学年・地域へ ポスターづくり

※川に出かけてどのような活動ができるか。当たり前気づくにはどうしたらいいのだろうか。

意見交流から

→当たり前気づくには、もうワンステップが必要なのではないか。子どもたちに委ねてみるのはどうだろうか。委ねた意見から、学習が進むといいのでは？視点によって活動が変わる。武庫川を中心にまちづくりが進められているのではないだろうか。防災としても学習できる教材である。佐保川に愛着はあるのか？武庫川に愛着ある児童の育成がひとつの視点。自然と文化の森協会とつながることで、憩いの場としての魅力を感じられる。ゲストティーチャーは、深みと厚みをもたらしてくれる。電子基準点がある数少ない学校

【ルーム4】ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 阿部友幸先生（山形大学附属特別支援学校） 作業学習 「みんなが喜ぶ仕事Ⅱ」

①目標

- ・使用する清掃用具の特性や扱い方及び地域を清掃することの意義を理解し、作業の確実性や持続性、巧緻性等を高める。
- ・清掃技術に込められた工夫や、自分たちが地域のためにできることについて考え、作業のやり方を工夫する。
- ・より良い地域社会への貢献に向けて、自分が清掃を通してできることを進んで実践しようとする。

②実践の概要

木工：ウッドグループ

布：クラフトグループ

清掃：クリーングループ

クリーンを第1希望とした生徒でグループを形成。クリーンで地域をよりよくしたい。

- ・山形市蔵王クリーンセンターにおいて、2か月に1回程度の定期的な地域清掃を行う。
- ・一般社団法人ビルクリーニング協会の協力を得て、清掃用具の使い方や清掃の意義を直接指導していただく。：乾式モップ、ほうき、タオル + 水モップ、掃除機の追加
- ・生徒自身が相手の存在を意識して自主的に活動できるようにしたい。
- ・喜んでくれる相手を意識できるようにしたい。
- ・7月に「アビリンピックやまがた2024」に参加し乾式モップなどの基本的な使い方は得とく。
- ・清掃を通して自分や周りの人にどのような影響があるのか具体的にイメージできていない。
- ・地域の方から清掃についてのアンケート調査に協力していただき、やり遂げることで、自らの清掃技術の向上や地域の人々の喜びを実感させる。

意見交流から

- ・フィードバックをもらえるようにすると、生徒も喜んでもらったという実感を持つことができるだろう。
- ・蔵王コミュニティセンター以外での清掃活動へと発展できないか。
→ 活動日が少ないため、発展は難しい。
- ・校内清掃にも影響はあるのか？
→ 校内清掃の時間がないので、不明。
- ・少なくとも清掃スキルを身につけることができる。今後、相手意識を持って活動することが大切だ。

2) 藤岡晃弘先生（奈良市立三碓小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「三碓平和学習 ～平和のために今から自分たちができること～」

①目標

- ・戦争を繰り返さないために活動されている語り部さんやゲストティーチャーの方の思いにふれ、平和の維持・実現のためにできることを考えることができる。
- ・平和を自分事とし、相手意識をもって、できることを表現することができる。
- ・平和の維持・実現のために行動しようという気持ちを持つことができる。

②実践の概要

- ・戦争当時の様子を語り部活動として伝えてもらう機会が少なくなっている。一方、戦争を経験

していない若い世代の中に平和のために活動している団体がある。カクカワ広島（核政策を知りたい広島若者有権者の会：2019年1月発足）と交流し、共同代表である田中氏から直接、話を聞く機会をもった。

- ・毎年、6年生から平和学習での学びを教えてもらってきているが、児童の記憶にはあまり残っていないように思われる。
- ・日本がアメリカなどと戦争をしていたことを知らない児童が26.6%。
- ・戦争や平和が児童にとって自分事になっていない。
- ・ロシアによるウクライナ侵略やイスラエル・パレスチナ間の戦争の方はよく知っている。
☆平和の重要性に関わる言葉を表面的なもので終わらせたくない。向き合い続けた末に出てくる思いや考えを、個々の児童が言語化し、表現することを目標としたい。
→ 修学旅行時に平和記念公園内を被爆者援護会の方々に班ごとにガイドをしていただく。
→ 核兵器禁止条約を取り上げ、日本と世界の今の核兵器問題について考えさせたい。
カクカワの田中氏とのオンライン交流。自分と同じ若い世代の人が、行動していることを知り、行動化を促すきっかけとしたい。
サーロー節子氏の「祈りだけでなく具体的に行動してください」という言葉と出会让せる。
→ 平和集会では各教室を訪れ、発表する。また平和宣言として発表する。

○事前学習

- ・沖縄戦の新聞記事
- ・桃太郎のお話から「鬼退治システム」を学ぶ。
- ・なぜ戦争に向かっていったのか。国策
- ・広島風お好み焼きから戦中・戦後の人々の暮らしを考える。
- ・核兵器について関挙げる。
- ・カクカワとのオンライン交流

○事中の学習・修学旅行

○事後学習：下級生との交流会、平和宣言を発信する。

意見交流から

- ・事前学修が非常に丁寧に実施されており、カクカワとのオンライン交流で、若者が「行動」している事実を伝えたことは行動化に効果があった。
- ・下級生への伝え方だが、なぜ、これまでの平和集会が記憶に残っていなかったのかを検討する必要があるのでは。
- ・理性よりも感性にうったえかけることが重要。
- ・下級生に伝えることや平和宣言では、行動化としては弱い。行動化の段階を検討してほしい。

3) 福原望愛さん（美術教育専修3回生） 中学校2年 総合的な学習の時間「水道水」

①目標

- ・水質保全のためには水の循環が重要であることに気づく
- ・川にゴミがあると氾濫時に危険度が増すことに気づく
- ・自分たちに何ができるかを考え、実践する。

②実践概要

- ・水質汚染の現状を把握する。 世界中の水質汚染による問題の把握

- ・地域の川を調べる。「どうして飛鳥川はきれいな状態が保てているのだろうか」理科で水の循環について並行して学び、水の地球上での循環を理解する。
- ・水質保全と水の循環の関係性を理解する
- ・地域の川の保全活動をされている団体へのインタビュー
クリーンリバー飛鳥の代表の話聞く（水質センターに代替の可能性）
- ・自分たちに何ができるかを考え、発表する。
生徒の意見予想
川のゴミ拾い、山への植林、川の生態を調べ図鑑にする、コンクリート道の撤去を提案する
- ・ゴミ拾い、清掃への参加

意見交流から

- ・学習のスタートは「世界の川」ではなく、「地元の飛鳥川」にすべき。そこで見つかった課題が、他の県・全国の川、世界の川の課題との共通点が見えてきた上で、SDGsにつなぐ。
- ・川環境の保全活動について、地元の方から話を聞いただけで終わっては、「お国自慢」の域を出ない。オンラインが広がっている今、オンラインで他府県の中学生とつながって、生徒同士の意見交流をした方がいいだろう。
- ・学校がしたいことを地域に提案するだけでは、地域にとって負担感が増すだけだ。地域がしてほしいと思っていることを教員が把握し、活動に参加することが、自分たちで活動する前段階になるだろう。